
月の王国

有終文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の王国

【Nコード】

N87410

【作者名】

有終文

【あらすじ】

大学生の美緒は、諍いの中で地震に巻き込まれて異世界に。そこで、『薬の女神』の神子として美緒は医師系貴族に拾われ、さまざまな出来事に巻き込まれていく。

一応、ファンタジー＋医療もの、としていきたいとおもっています。一部、残酷な描写と思われるものも含まれる可能性があります。

プロローグ（前書き）

最初から少し、暴力表現があります。気をつけてください。

ブローグ

私は、けっして必要とされなかったんだろう。
だから、胸が痛むんだ。

「あんなにかいなければよかったんだ」

親友とおもっていた女からそんな言葉が零れれば、
私の心臓は哀れなくらいに大きくはねた。

「あんたさえ、いなければ！」

彼女がただ、一時の激情に飲まれていることも心のどこかで分かっていた。

彼女が、ただ、勘違いしていることも。

けれど、私の心は凍り、何も考えられない。

動けないうちに窓際に寄せられてしまう。

「この、売女め！」

彼女は私の首に手をかける。

苦しい、と思うと、怒っているはずの彼女の顔が何故か哀しく叫んでいるように見えた。

そう思うと、声も出なくなっていた。

息ができずに、苦しさのあまりに何も考えられなくなっていく。

そのときに不意に、予想もできない揺れが建物を襲った。
地震のようだった。

肩からかけていた石のように重い鞆が窓ガラスにあたり、窓に大きな穴が開く。

開いたと思うと、私はバランスを崩して、そこから落ちていた。

「美緒」

親友の声が、聞こえた気がした。

先ほどの哀しい顔ではなく、優しいいつもの、顔だった。

「真木ー?!」

遠くでは、別の声がする。低い声。

それが誰の物か判別する前に、私の意識はゆっくりと暗闇に落ちていく。

「美緒ー！ー！ー！ー！」

私は親友の声を最後に、意識を手放した。

起きてみれば、見知らぬベッドで私は横たわっていた。

辺りは、ただの白い壁に囲まれた空間だった。

「x* . . ?」

何かの音に気付いて、音の方を向けば、そこには男の人がいる。

その男は、金色の髪に碧色の瞳、そしてそれらを引き立てる白い肌をしていた。

美しい顔つきもしていたし、体も少し男性にしては華奢な印象では

あるが引き締まった体をしていた。

何の音か、とおもったのは、その人が発している言葉らしい。言葉なのか、と思って思い返してみると、ハミングで紡がれる歌のように軽やかで耳障りの良い言葉。

「\$+*@&p;:~……！」

何を言っているのか、さっぱり分からないから余計なのかも知れない。

そのとても聞き心地のいい声が楽器のような何かに思えてしまう。目を閉じて、その声に耳を澄ませば、いつの間にか入ってきた別の男性に頭を撫でられていた。

「ジエイド」

彼は私に聞き取れるように、ゆっくりと私に向かっていった。それが、この世界で初めて私が覚えた単語だった。

プロローグ（後書き）

初めまして、有終文と申します。とちつき あや
ファンタジーにはしていますが、題材は結構身近な物からも抽出してネタ作りしていく予定です。
拙い小説ではございますが、よろしければしばらくの間、おつきあい下さい。

第1話 はじまりの生活 1

私がなんとかこの世界、というかこの国の言葉でコミュニケーションがとれるようになるまでに半月、

意思の疎通がなんとなく図れるようになるには更に3月、

自分の思うことを何とか伝えられるようになったのは更に3月後だった。

あつという間の半年だった。

毎日を過ごすのがいつぱいいいっぱいで、『元いた場所に帰る』という概念すら消え去ってしまうほどだった。

けれど、帰りたい、という思いを抱かないほどに、居心地が良かったことも、

あの場所に私の居場所がなかったことも、理由の一つなのかも知れない。

言葉も通じない娘を相手するのも大変だっただろうに、ジェイドも、グレイスも、半年の間、しっかり私の相手をしてくれた。

文化の違いやマナーの違いにもめげず、何度も紳士的に教えてくれた。

おかげで、辿々しくはあるけれども、この国の言葉も、日常会話程度なら理解出来るし、話すことも可能だ。

彼らのように、流れるように美しい歌のように、まだまだ全然話せないのだけれど。

まさしく、ジャパニーズイングリッシュのような言葉も、ジェイドやグレイスには通じる。

おかげで日常的な簡単な常識は把握出来たし、この国の地理なども少しは理解出来た。

1日を24時間としていて、朝昼の12時間、夜の12時間と区切

っていること、

1時間は常に一定ではなく、朝の開始を日の出、夜の開始を日の入りの時刻とし、それを12で均等に割っているのだ。

この屋敷の中では、細工ものの時計が時刻を正確に刻んでくれているので鐘が無くても時刻は分かるが、その時計は高価で誰でも手に入る物ではないため、街の至る所には鐘が配備してあり朝昼は2時間ごとに鐘が鳴る。

そのような習慣は、『陽』と『月』に対する、彼ら独特の宗教観が相成っており、時刻を神々の名前で揶揄することや象徴するもので指すこともある。

そう、彼らは多神教だ。キリスト教などのように唯一神しかもたないような宗教ではなく、数多くの神を持ち、その中でも貴族は、自分の家系に関わる神を最も信仰している。（もちろん、全ての神に対してある程度の尊敬の念は抱いている）

ジェイドやグレイスは、正確には違うようだが、医学の道を示す女神『メデイ』を信仰している系統に属す貴族のようだ。

そのせいなのか、家の至る所には本があり、図から見ると人体が描いてあったりするので医学の書なのかもしれない。

だからなのか、私と一緒にとばされてきた本を見たときに、ジェイドが半ば興奮して私に聞いてきたのだ。

『ミオ、これは、何の本なんだ？』

最初はなんて言ってるかもわからなかったんだけど、ジェイドは我慢強く、

何週間も何週間も聞き続けてくれて私が理解するまで待ってくれた。私は、

『私の、国の、人の体の仕組みを勉強するための本』

と、単語をつなげながら答えると、ジェイドは一層興奮してページをめくる。

言葉が分からないのがもどかしいのだろう。

私は指を指しながら、自分のボキャブラリーを総動員させて説明していく。

『これは、血の通道、リンパの管、神経の絵』

『リンパとはなんだ？』

『リンパは、人が自分の、体を守る仕組みで重要な働きをします。えっと…』

頑張っても、言葉が良く分からなくて、ジェイドは一層頭を捻らす。上手く説明ができないのがもどかしくて、悶々しているとジェイドは私の頭を撫でた。

ジェイドのクセなのか、宥めるとき、落ち着かせたいとき…とにかくがあるとジェイドは私の頭を撫でる。

『今度、な』

なんだかもどかしい。

次の日からは私が、単語を聞くためや医学の話を聞くために、ジェイドの方に本を教えることなる。

本話を聞くと、医学と宗教とは切っても切れない関係があつて（死生観とも関係するからといわれればそうなのだが）、ジェイドの信仰するメデイ神の話、司祭の関わり、この国の死後のとらえ方なんてもの、少しずつ出てくる。

それらを聞いていると、本当に日本とは違う場所なんだと実感してくる。

目の前のジェイドやグレイスの顔つきや何かも日本人のそれとはま

るきり違つてはいたけれど。

『そうだ、ミオ』

『ジエイド、なに？』

『明日か明後日には、クリスがきてくれる』

クリス？誰がよく分からなくて首を傾げてしまう。お客様だから大人しくしろと言うことなのか。

『クリスがくれば不便も減るから』

言葉の意図が分からなかったけれど、うんと頷いたら（うなづくのが首を上下にする習慣は一緒だった）、夜を知らせる鐘が鳴ったから、夕食の準備をしているだろうグレイスを手伝うべく、私はその場を去った。

第1話 はじまりの生活 1（後書き）

1話1話が短くてすみません。

1話がコレでは書きたいと思っているところまで到達するまでが長いです…。

おつきあい頂けると嬉しいです。

第1話 はじまりの生活 2（前書き）

第1話 はじまりの生活 2

夕食を食べおわり、片付けも終わった位だろうか。

玄関が賑やかな気がして、いつもは近づかないのに玄関の方へ行ってしまった。

『あ、\$ー?』

後悔したのは、知らない男性がいたこと。

ジェイドやグレイスはゆっくり話してくれるから聞き取りや理解ができるのだけれども、その男性は早く話しかけるので聞き取りが難しい。

しかも妙に馴れ馴れしく、どうすればいいか分からない私は逃げ出したかった。

けれど、逃げ出してジェイドやグレイスの迷惑になるのは避けたかったので中途半端にニコニコして理解不能の言葉を聞くこうになった。

その様子におかしい、ということ気付いたのか、その男性はなにが思い立ったように私を見て、何かを一人合点していた。

『そうか』

そう言っで、その男は、何かを言っで私の髪を掴んで、キスをしてきた。

「ひいひいひいー！」

私は余りの驚きに、自分の国の言葉で、近所迷惑になるのも忘れて大きな声を上げてしまった。

『ミオ、何があっただんですか?!』

グレイスはその声に走ってきてくれた。その顔を見て泣きそうになっていた私は、グレイスを盾にその男から隠れた。

『まあまあ、そんなに驚かないで。あ、グレイス、久しぶり』
『クリスマス様』

その名前に聞き覚えはあったけれど、私の中で「要注意人物」の指定をつけた人物がそれだとは信じられなかった。

『ミオ、紹介しますね。この方が、魔法師のクリスマス・マイヤー様です。ク・リ・ス』

グレイスやジェイドは固有名詞は一音一音区切って教えてくれる。けれど何故かいつもと違って聞き取れる気がする。

『分かりました、その変態の人がジェイドの言っていたクリスマスなんです』

言うてから私はビクリした。日本語で言っていたはずなのに、自分の口から出たのは滑らかな異国語だったから。

日本語だからと思って、小声とはいえ、かなり失礼なことを言ってしまった。気がついても後の祭り。

『ほう…? 僕を変態呼ばわりだなんて、かなり変わった子だね』

『え、え、なんで、私、言葉が話せているんですか?!』というか、あああす、すみませ…ん…!』

『いいよ、別に僕そう言うの気にしないし。言葉ができるようになる』

ったのは魔法をかけたんだよ。

簡易的なものだから1週間ほどこしか効果無いけど、あとでしっかりかけ直してあげるよ。半年間、大変だったね』

ジェイドの言っていた不便とは、言葉の不便ということだったのか。どういう仕組みで分かるようになったのかさっぱり分からないが、魔法といったのか、この人は！

自分に何をされたか分からないことが少し気持ち悪くなってぞっとしていると騒ぎを聞きつけてか、奥からジェイドがやってきた。

『どうした？ クリス。早いじゃないか』

『色々あってね。その子が神子なんでしょ？なかなか可愛い姿で出迎えてくれてね』

『まあ、……それは、グレイスの着せ替え人形だから』

格好のことについて言及されているのだろうか。

私の服は白を基調にした、リボンやらフリルやらが沢山ついたワンピースだ。

他の黒だの、青だの、ピンクだのの服はあるが、基本フリルやリボンがてんこ盛りの服。

初め見たときは、さすがに成人式も通り越してから、こんなコテコテのフリルをきるのはどうなのかと思ったのだけれども、

この世界でこういった服が普通のようなことをグレイスがいつており、それを鵜呑みにしてずっと着てきた。

半年も着ていればさすが慣れたのもあって、あんまり抵抗感がなかったのだけれども、やはりおかしいのだろうか。

『グレイス……』

『いえ、あの、ミオ』

『やっぱり、20歳の、もう小娘でも何でもない女に、このフリル

はないよ！こういうの、普通は着ないんだね？』

『ミオがあまりにも愛らしいからで……って20？』

正確に言うと、半年くらいすぎたから21になってしまったかもしれないが。

グレイスが露骨に私の年齢を聞いて驚いている。

確かに、西洋風の女性というのは大人びているんだろう。

私は身長は日本人の成人女性の平均よりは少し低いくらいだったのもあってか、若く見られたのだろうと推測する。

『15くらいかと思っていましたよ……まさか、同じ年だなんて』

『え、グレイスって20なの？もっと上かと思った』

この会話を端から聞いていたジェイドたちがクスクスと笑っている。

『出会って半年にして、年齢をきくとはな。普通なら、ありえねえな。ちなみに俺は24だ』

『僕は28だよ。…ねえジェイド、僕は長旅で疲れているし、中に通してくれると嬉しいんだけど？』

グレイスが我に戻り、急いでクリスの荷物を持って中に入るの後ろをついていった。

第1話 はじまりの生活 2（後書き）

お気に入り登録などありがとうございます。

書くと、思ったよりキャラがたってきたことに驚いています…。
美緒が思ってたより元気です…。

第1話 はじまりの生活 3

ジェイドの家はとても広い。その全てをグレイス一人で世話をしている形になっている。

けれど私が自由を許されていたのは、私に与えられた部屋と台所、浴室くらいなもので、それらもあまり離れてはいない。

玄関に近づくのは、ジェイドやグレイスが外出するときの見送り程度で他は近寄ることもしなかった。

言葉が通じないのに、人に会う可能性をわざわざ自分から高める必要もないと思っていたのも理由の一つ。

けれどそれだけじゃなく、もともと…人というのが恐ろしい、というのもあった。

ジェイドとグレイスには、なぜか親以上に信頼を寄せられる何かがあったから怖いと思うこともなかったのだが、クリスというこの男に関してとは違った。

何を腹に抱えているのか分からず、それが空恐ろしいのだ。

飄々としているのに、常に笑顔でいるのに、心からは笑っていないように思えた。

久しぶりに、ジェイドとグレイス以外の人間にあったということもあって、ただの人見知りとして、二人が感じてくれるのが幸いだっ

た。

私は、部屋に入っても極力クリスに近寄らず、グレイスの後ろに隠れては、退室の機会をうかがっていた。

普段ならすぐに解放してくれるはずのジェイドが今日に限っては引き留めようとする。

『ミオ、話したかったことがあるんだ』

ジェイドは、退室したそうな私を呼んで隣の椅子に座らせ、クリスマスから受け取っていた紙を広げて私に見えるように机の上に置いた。それには12の人や物が描いてあり、ジェイドはその中の一人の女性を指差した。

『通じていたが分からねえが、俺やグレイスは、この、メデイ神を信仰している。……メデイ神が何の神か、ミオは分かるか？』

『医学の神様』

良く分かったなあと小声で言いながら、ジェイドは私の頭を撫でる。

『まあ、正確には少し違う。メデイ神は、薬と毒を司る女神だな』
『うん』

『メデイ神を祀っている神殿の神官に、お告げが聞こえた』
『我が神子が、降り立つてね』

ジェイドの言葉を継ぐように、腹に何か抱えたような笑顔を崩さないまま、クリスは言った。

神子？それはなんなのだろうと、考える。

『神子には二つの意味がある。一つは、神に祝福されたもの。もう一つは、化身として神の力を借りるもの』

『両者ともに、とてもめでたくありがたいものなんだが、後者は桁が違う。神の力をそのまま借りることができるんだからな』

何が言いたいんだろうと、考えを巡らせて、話の流れを考えると、ぞっとする考えが思いつく。

『まさか』

『多分、その、まさかだね』

クリスが一層ニコニコとした顔をして、私の方を見る。顔は笑っているはずなのに、目が笑っていないような、そんな気がした。

『ミオ、君はメデイ神の、神子だ』

『嘘?!』

元の世界から、どうやってかは知らないけれど、この世界にやってきた。

そのときに何かを、神に託されたとか言うそんなシチュエーションに遭遇した記憶などはない。

私自身には、その声は聞こえたことはないし、神様の化身など、考えたこともない、……何かの間違いだ。

『残念ながら、証拠ならある』

『え』

『ミオが倒れていて看病した際、……背中に、メデイ神の御標があったことをグレイスとジェイドが確認したそうだよ』

クリスは真ん中の机に広げてある絵図の、女性の背に描かれている図形を指して笑む。

背中など、本人にどうやって見て確認すればいいのかわからない。

合わせ鏡があれば見えるのかも知れないが、用もなくそんなことをしない。

『化身の神子としての証は、体の何処に刻まれる……背中なり腕なりどこかに』

『本来なら、化身の神子は神殿に奉納され、神の御許に一番近いところで祈りとその身を捧げることとなっているんだよ』

『通例ならば、な。けれど、今回は事情が特殊なんだ』

『今回は、メデイ神だけでなくもう一柱の神も、化身の神子と呼んでいるんだけど、

そのデル神とメデイ神は、この度、神子を奉納されることを望んであらせない』

二人が重ねるように畳みかけるように私に話しかける。

『人の世で、自分たちの力がどのように生きるのか。使われるのか。純粹に興味があるそうなんだよ』

……興味……？

良く分からずに目をパチクリしていると、クリスは小馬鹿にしたような目で私を見てくる。

『つまり、君は僕たちの切り札なのさ』

第1話 はじまりの生活 3（後書き）

中途半端なところでできました…；

あと、3話ほどで前置きが終わって、書きたかったところに着手出来るのかなあと言う感じです…。

お気に入り登録ありがとうございます。励みになります。

第1話 はじまりの生活 4

その夜の、そのあとのことは、良く覚えていない。

翌日になって、目が覚めたはずなのに、私は何だったのだろうと意識ははつきりしない。

朝はグレイスの手伝いもあったのだけれど、それもわすれて頭の中が色々なことが巡っていた。

私は心のどこかで、この世界にとばされたことは“あの人達から助けてくれるため”だと思っていた。
だからこそ、……ジェイドとグレイスを信頼して、安心して、一緒に暮らしていたのかも知れない。

「……く、…ははっ…ははは…っ」

口から自然と自嘲が零れた。

利用されるためだと。

そのためと聞いた方が、何故かしつくりと来る。

人間、損得も何もない愛情などあるはず無いのだ。

そんなもの、あったとしても、自分なんかに注がれるはずがない。

けれど、グレイスも、ジェイドも、無償の優しさで接してくれていると思っていた。

あの、半年間が何だったんだろう。幸せだったあの、半年間。

余計なことなど何一つ考えなくても良かった。それだけでも幸せだったのに。

私はまた、地面に頭を押しつけるような生活が始まるのだろうか。

そう思うと、足下から崩れてしまふような気がした。

『……ミオ？』

時間になっても、食卓に來なかつた私を心配してなのだろう。

グレイスがおそろおそろ私の部屋に入ってくる。

寢間着には着替えてはいたので、グレイスが入ってきてもいいように一応上着を羽織り、ベッドから離れた。

『どうぞ』

『朝食ができたのだけれど、食べられる？』

いつもはみんなで食卓を囲うのに、グレイスが二人分のスープとパンをお盆にもってきているのには少し驚いた。

ここで食べる気なんだろうか。

何も言わないでいると、グレイスはテーブルの上に食事を置いて座り、にこりと笑って開いてる方に私が座るように促した。

グレイスのその様は一枚の絵画のようで、うつとりと見つめてしまふ。

『ミオ？』

『わかつた、頂くね』

隣に座つて、パンをスープに付けてふやかしているときに、グレイスが溜息をつく。

『昨日の、クリスマス様の言い方は、ないよね』

『でも、事実なのでしょう？』

『違うよ。……僕も、ジェイド様も、そんなつもりでミオと一緒に』

この半年、いたわけじゃないよ』

ぽつりと、言う。

グレイスはどちらかというところ、いい意味で少年のようないいところが多い。

身のこなしや姿形からして、生粋の貴族なのだろうけれど、何かを隠したりや騙したりするようなところがなく、まっすぐ自分の心を向けてくれる。言葉が通じなくても、それはどこかで感じていた。何より、まっすぐ見つめる目に曇りが無い。

『確かに、ミオはメディ神の神子だよ。だけど、ミオはミオでしょ？』

『だけど…』

『ミオ、僕さ、ミオのこと、家族だと思ってたんだけど、……違うかな』

『……！』

『僕の家、結構複雑で、……五つ下の妹がいるんだけど、もう逢えなくて。その妹のように、ミオのこと、可愛がってたんだけど』

まあ、ミオは同じ年なんだけどね。

むけてくれる笑顔に偽りなど見えない。

なんで、私は、あんな人たちとこの人を、一瞬でも同じように見たんだろう。

『ミオ、泣かないで』

『グレイス、ごめんね…ごめん、なさい』

感情が高まって零れてきた涙。

辛くて辛くて泣いたことはたくさんあったけれど、こんなに嬉しく

て、…申し訳なくて、泣いたのはいつぶりだろう。

『ミオも薄情だよ、昨日のクリスマス様の一言で、僕たちのことなんだと思っただか』

少しおどけた感じでいう、グレイスの声。

『大丈夫、ミオ。お兄ちゃんを信じなさいって』

『グレイスがお兄ちゃん？ふふ。だったらジエイドがお父さん？』

『誰が、父だ。せめて俺も兄にしておいてくれよ』

『ジエ、イド…』

そこには優しい顔をした、ジエイドがたっていた。

第1話 はじまりの生活 4（後書き）

中途半端なところできれる回が続いてすみません…。
あと2話ほどで下準備は終わるはず、なのです…。
お気に入り登録ありがとうございます。

第1話 はじまりの生活 5

『そもそも、お前を看病し始めた頃、神子だと言うことすら知らなかった』

ジェイドは、私のベッドに腰掛けて（大きくない、ビジネスホテルの一室を広くしたような部屋なのでベッドが隣にある）、そう言う。

『お前が神子だと分かったのは、クリスに相談を持ちかけた時に、“もしや”ってクリスに言われなければ、背中 of 刻印にすら気付かなかったさ。……というより、お前は男の前、というより男と一つ屋根の下だというのに無防備すぎだ』

いつ見たのかと問うと、私が夏の日に、グレイスからもらった夜着をきて（そのときは夜着だというのが分からなかったのもあるけれど）歩き回っていたとき、背中の文様が透けて見えたらしい。意識しなければ分からない程度に薄かったから、疑ってみて初めて分かったのだという。

なぜだか、ブラが透けて見えるといわれたときのような気恥ずかしさが今更ながらに襲ってきた。

確かに、彼らに限らず、私は“異性”というものにたいして、そのような意識を持つのは疎いのかも知れない。と思ひ当たる節は元の世界でも指摘されていた。

『今だって部屋に野郎を二人も入れるし』

『えっと、あの…ごめんなさい？』

『まあいいさ。グレイス、クリスが昼過ぎに来るから、ミオの準備は任せたよ』

準備？と首を傾げると、いつの間にか持ってきていたのか、たくさんのフリルのついたドレスが見える。
もしかして、それ、私が、……着るの？

『じゃあ、着替えてくれるよね？』

につこり笑ったグレイスに、はい。としか返せなかった。

あの後、服を置いて出て行った男二人。

服を着たのはよいのだけれども、服が白のフリルとリボンがこれでもかといっている薄紅色のドレス。

着替えたことを伝えると、グレイスが中に入ってきて髪を結ったり化粧をしたり。

グレイスはとても器用に髪を結び上げ、まるで着せ替え人形になったような気分だった。

どうして今日は気合いを入れて着飾るのかと問えば、笑顔で昨日のリベンジだと答えた。

『僕と、ジェイド様がどれだけミオを可愛がってるのか、見せつけてやるんだよ』

『へ？』

『クリス様が、男所帯に女一人は神子にも僕たちにもキツイだろうって、ミオを引き取るようなことをいったんだよ』

『クリス、が…？』

『ミオは、僕たちはそうは思っていないけれど、政治的なアイテムと

しても魅力的だしね。…… 本当は僕たちが侍女を雇えばいいんだけど、

色々あつて雇えないから……。でも、僕たちだけでも充分、ミオに不自由させてないのをアピールしようつて、ジェイド様と決めただよ

笑顔でメイクまで施した 그레이スはジェイドを呼んでくる。

ジェイドは一瞬驚いたような顔をしていたけれど、笑顔で似合うよと言ってくれた。

こんなフリフリドレスの似合う二十歳も、少し奇妙で、コスプレをしている気分になるんだけれど。

『ねえ、明日もこんな格好……?』

『うん、これから僕が毎日頑張る!それともドレス、きつかった?』

『え』

申し訳ないが、このドレス、いつ採寸したのか分からないが確かにぴつたりで……そら恐ろしいと思った。

けれど、このドレス。かなり重い。昨日までの服は、フリルは満載であつたがここまで重くはなかった。

そして、靴はヒールが涙が出るほど高く、歩くのがヒョコヒョコになつてしまう……というか、服の重みに耐えられず、ヒールが折れそう

だ。走るなんてできないし、

『僕さ、妹がいるつて言つたでしょ?だから、こついうの、得意なんだよね』

『でも、会えないつて』

『ここ数年の話。その前は毎日のように髪を結つてだの、ドレスを

選んでだの、我が儘ばかりの、……僕に懷いて、本当に可愛い妹だったよ』

どこか遠い目で寂しそうに言うグレイス。

『だから、苦つて訳じゃないし、本当に楽しいよ』

と思つたら一瞬で切り替えてきた。

これで分かったと了承したら、本当に毎日されそうだ。

平安時代の女貴族達を賞賛したい。私にははつきり言って無理だ。毎日毎日こんな重い服を着るなんて。

返答に困つてどうしようかと思つたとき。

『きゃあああああああ』

断末魔が、家の外から聞こえてきた。

私は何も考えず、そちらの方向へ、靴を脱いで、かけだした。

第1話 はじまりの生活 5（後書き）

一回消えちゃったので書き直したら別物になっちゃいました…
というかこの描き方なら、線の前まで前話に入れた方が良かったで
すね…

次回、少しグロイ表現があるかもしれませんが…

お気に入り登録&評価、本当にありがとうございます。

書かないでおこうかなと思ったときの心の支えになります…

（早く色々、身近に役立つ医療豆知識入れたい…！）

第1話 はじまりの生活 6

初めて屋敷を出た。

急いでいくと、そこには惨劇が待っていた。

少女が、貴族の馬車に接触したのだ。

10歳にも満たないくらいのその子供は肩を車輪でひかれたのだろう、そこから、血が大量に流れていた。

赤い轍が残っているだけで、馬車は姿を消していたが。

私は何も考えなかった。

考える前に、体が動いていた。

『誰か、この子を固定して!』

ケガをしている左肩を上にして、寝ころばせ、少年の服を脱がせて傷を確認した。

出血は酷いが、思っていたよりも傷は浅くはない。

脱がせた少年の服で、傷を圧迫し、止血をはかる。体が固定出来ず、上手く圧迫ができず、服がみるみる赤くなる。

私の行動に驚いたのだらう。辺りにいた人はその場で立ち尽くしている。

驚いても呆れていても、しょうがないと思う。けれど、それでは人は救えない。

『誰か!』

叫んだ。けれど、誰も動かない。そう思った瞬間だった。

『ミオ。体を支えていればいいんだね?』

グレイスが来てくれた。体を支えて、傷口を圧迫してくれる。服が全て真っ赤になって、ベトベトする。私はドレスを破って、その服の上に重ねた。

蓋がわりの服を変えてしまっただけは止まる血も止まらないからだ。血は止まる。そう信じて、少年の脈をとり、顔色や意識を確認する。色は悪いが、まだ仄かに頬が赤いところを見ると出血性のショックは幸い起きていないようだった。

小さく、痛い、痛いと言った様子からも意識がしっかりあるのも確認出来た。

輸血ができれば一番なのだろうけれど、そんなものない。

それを言うなら、この血に触れることすら危険だ。血や唾液…つまり人の体液というものは多くの感染症を媒介する。

被災したときのマニュアルでも『ビニール袋を使用すること』。

今では人工呼吸ですらする必要性と感染のリスクを比べたときに、リスクの方が大きいとして、しない方がいいという方向性にある。

「家族であっても他人なのだから人の血や吐瀉物を触らないこと」なんていわれることだって、よくある。

大学の医療倫理の先生に、「外国に行つて事故に巻き込まれても輸血はするな。感染症になる」と言われたことにショックも受けた。

けれど、今はそんなこと言つてはいられない。

今しないと、この子は確実に死んだのだ。今だって死なない確約など無い。

しばらくグレイスが固定していると血が止まってきた。

私はレースを破ると包帯がわりにしてその赤くなつた服を固定した。歩けそうかときくと彼は首を振る。仕方がない。出血量が多く、ショックを起こしていないだけでも奇跡に近い。

『グレイス、この子を屋敷に運びたいんだけど……担架みたいなものはないかしら』

『担架？』

『この子が横になったまま私たちが運べるようにしたもののなんだけど……無いのなら気をつけて抱いていくしかないわね』

『僕が抱いていくよ』

グレイスが肩に触れないように慎重にその少女を抱く。少女は衝撃に一瞬苦痛を露わにしたが、文句は何一つ言わなかった。

『いいこね、戻れば痛みが和らぐ薬をあげるからね』

私がこちらに来たときに一緒にとばされた鞆の中に、いつも持ち歩いていた風邪薬や痛み止めが入っていたはずだ。

そんなもので和らぐような傷だとも思わなかったが、無いよりはマシだろう。

グレイスと慎重にその少女を屋敷まで運び、私のベッドに横にし、今日はまだ止血に使用した布は剥がさない方がいいだろうという判断で、包帯だけはまき直してしっかり固定した。

私は久しぶりに自分の鞆を引きずり出し、薬を取り出す。

よかった。抗菌薬も1週間分ある。PTPシートから薬を出し、水と一緒に彼女の元を持っていく。

『痛くて、辛いのは分かるんだけど、この薬飲めるかしら？』

彼女は弱々しく頷いた。

けれど、とてもじゃないけれど、苦しそうで粒のままを飲めそうではない。

私はコップの水を半分ほど捨て、その中に錠剤を落とした。カプセルは外し、それも水に溶かす。

『苦いんだけど、このコップのは全部飲んでね』

可哀想なんだけど、抗菌薬は非常に苦い。でも飲まないと、しかめた顔を申し訳なさそうに見ながらそれを飲ませたのだった。その後、安心したのもあったのだろう。その子は安らかに眠っていた。

『騒がしいが、何かあったのか？』

私の部屋に入ってきたジェイドが私の格好を見て少しがっかりしていた。

我を忘れてはいたけれど、折角用意して貰ったドレスをびりびりに破いてしまったのだ。

『その子は？』

『ケガをしていたので……』

『く、……くはっっ…、神子がこんな御転婆だったなんてね』

後ろにいたクリスが笑っている。

この格好を見られて御転婆でないと言い張るのも何だったので、流しておいた。

第1話 はじまりの生活 6（後書き）

もう少しだけ続いたら、幾つか、豆知識満載のエピソードを練り込んだ話になります…！

思ったよりも長くてすみません……。

ちなみに、外国云々の倫理の話は私の実体験で、翌年から倫理の講義の先生が替わっていたのは覚えています。でも、感染のリスクがあるので、不用意に血、吐瀉物、唾液には触らないのは鉄則です（この話の世界では無理ですが）。

今は輸血なんかも同意書が必要です（宗教上などの理由で不同意で輸血すると病院側が訴えられますし…）

お気に入り、評価等々ありがとうございます。

第1話 はじまりの生活 7

グレイスの方から事情を説明し、その子供はしばらくこの屋敷で預かることになった。

その子の名前はフィネというらしい。

少し赤茶けた髪とソバカスがチャームポイントの可愛い女の子だ。その子は、名前を告げると、疲れたのかすやすやと眠りについた。

『あ、そうだ』

クリスが私の方に向かって何かを投げる。

私は急いでそれを受け取って、何かを確認した。白い宝石がついた指輪だった。

『それに、魔法をこめておいた。人体にかけると何回もかけ直さないといけないから』

『上等な翡翠の指輪、準備させておいてよくいうよ』

翡翠というと碧……そう、ジェイドの瞳のような色を想像していたのだけだ。

指輪はどちらかというと、とうかどちらかという判断も虚しいくらいに白い宝石。

『本当に純度が高い翡翠は、白いんだよ……使いたくないコネまで使って取り寄せた』

『まあ、使えるものは使わないと。おかげで、身につけてれば、言葉に困ることはないし、お守りになるよ』

指につけても、ネックレスにしても、どちらにしても効果があるら

しい。

言葉が困らなくなるのは嬉しいので、それはとても嬉しいのだけだ。

クリスから貰ったというのが、気になる。……いや、して貰っておいて、こんな風に思うのは恩知らずだとは思うのだけれど。

クリスにはあんまり、心から信頼とかできない何かがある、…この指輪に他に何か仕込んでいるとか…。

『大丈夫、ミオ。クリスは人としては傲慢で我が儘で修正不可能なくらいの腹黒かもしれないけど、腕だけは信頼できるから』

『その言いぐさも気に入らないなあ、ジェイド。使わないなら使わないでもつたないから、返して』

『誰が返すって言ったのよ。使わせて頂きます、ありがたく！』

私は悩んで手も仕方がないので指輪を着けた。

……頭がクラクラする。

『あれ、魔力が強すぎたかな…？』

『馬鹿！ミオ……？』

倒れかけた私をジェイドが支えてくれたのを見て、私は夢に落ちる。

『やられた』と正直おもったけれど、それは仕方がない。

その指輪が私に馴染むまで、3日間、私は寝続けた。

第1話 はじまりの生活 7（後書き）

次からは少し番外編という名の小咄が挟まって、クリニック開業予定です…。

ちなみに、宝石は純度が高い^{ガーネットとかも}無色です。あれは微量の金属の混入で色が付いてるので。

翡翠は結晶が小さいため白濁して見えるようですが。あと、孔が多いようなので白いものは染色されて売られるようです。

恋愛要素が無くてごめんなさい…フラグがたつならこの章のあの人なんです…思ったより、たらしにならなかった模様です。。。この章の最後らへんで、怒られる覚悟でフラグ立てたんですが…あんまり、絡みがない…

お気に入り登録ありがとうございます。

第1・5話 ミオの来てからの生活（前書き）

グレイス視点です。

伏線らしきもののために色々曖昧な描き方になってしまっ
て申し訳ないです…。

第1・5話 ミオの来てからの生活

ジェイド様は今は学士のようなものに身を竊してはいますが、本来はやんごとなき身分の御方で、本来は従者が僕一人と言うことはあり得ないことだと思います。

けれど、ジェイド様は僕だけを選んでくれました。そのことを誇りに、僕はジェイド様の身の回りの世話をしているといっても過言ではありません。

そんな環境の中でミオを拾って、もう半年もたちました。

初めは見知らぬ異国の出で立ちをしており、全身痣だらけで意識不明の状態だった彼女を見つけられたのはジェイド様でした。

意識が戻らぬうちから何かを呟いておりましたが、聞いたことのない言葉で、何を言っているのか全く分かりませんでした。

意識が戻ってから何も言っているのか分からず、どうしようかと焦った僕に対し、ジェイド様は「ゆつくりと分かっていた方がいい」と呟いて身振りと言振りでコミュニケーションをとりました。もちろん、僕もそれに倣いました。

最初は、ミオというのが名前なのか良く分からなかったのが正直な感想だったのですけれども、ミオと呼ぶと反応したので恐らく名前なのだろうという結論で、彼女をミオと呼び続けました。

彼女は最初、何をしても、何かに怯えている子供でした。人に恐怖を覚えた獣と接するような気分で、接していききました。次第に言葉は伝わらなくても彼女の心が分かっていたいき、彼女が初めて笑ったときにはジェイド様と二人でお祝いできました。

新しい家族に、ジェイド様の心も開いていくのが、とても嬉しくなりました。

僕は、恐らくもう二度と会えないであろう妹と重ねて、ミオを可愛

がりました。

ジェイド様が心を閉ざしてしまったのは、ここ数年のことでした。笑うこともせず、かといって怒ることもしない。

全ての感情を、過去と共に封じ込めてしまつような、その姿に、僕をはじめ多くのものは胸を痛めました。

全てを鬱ぎ込むようにできていたジェイド様の心の壁を、言葉通じぬ娘が壊していくことが何よりも喜ばしいことに思いました。

クリスマス様があらつしゃって、言葉が通じるようになったミオは、以前より笑うことが多くなりました。

また、この間の一件より、街で何かあると、この屋敷に連れ込まれたり、どうしたらいいと問い合わせが来るようになりました。

そして、ミオの提案で『クリニック』なるものを作ることになり、ミオはその準備で街のそこらを走り回つてゐるのです。

「グレイス！ ケビン様のところに行くのだけれど、一緒にいってくれないかしら？ 色々頼んでいたものができたみたいなのよ」

ケビン様と言えば、この国きつての変わり者…ではなく、研究者。ミオが指輪をつけて倒れて…数日後、目を覚ました後に、あれほどまでに嫌がっていたクリスマス様に何かしら相談し、ケビン様を紹介して貰っていました。ケビン様の所に行くのと、ミオは何かを頼み、3日ほどそちらの屋敷に世話になっていました。ケビン様の方も何か興奮されている様子で、何かに取り組み始めていて……。それが頼んでいたものなのでしょうか。

「いいよ。何か準備はある？」

「籠とか……結構こまごまとしたものもいっぱい頼んだから」

一体何を…と、僕は聞くこともできず、籠を携えて、ケビン様の屋敷へと向かった。

「やあ、愛しのミオ」

「ケビン様、お久しぶりです」

屋敷につくなり、二人は抱き合うばかりの挨拶を交わしているのに驚きました。

そもそも、ケビン様は社交界にもでられないような……どちらかというと、人と付き合っっていくよりも内に籠もっているタイプだと思っ
っていたからです。

「今日も面白い話をしてくれるかね？」

「んー、今日は少し難しいです。グレイスも一緒ですし」

「そうか……また、今度、あれの続きを教えてくれ。頼まれたものは、ここに」

「ケビン様、ありがとうございます！」

そういつて差し出されたのは、驚くほどに大きな山でした。これは、女で一つでは運べないから連れてこられたのだと確信しました。

それを持つのを手伝うように言われ、だいたい3：1の割合で僕が多くに持つようにしました。腕は細いですが、女子供よりは力がありますから。見た目よりは軽かったとはいえ、結構な重さでした。

「ありがとうございます」

「これは、なに？」

「私たちの世界の薬をね、作ってもらったの。機械も作って、確認試験までしてもらったから大丈夫」

「薬ですか？！この、粉が？」

持ってきたものの中には白い粉に黄色の粉に、様々な粉がある。

「胃薬とか、風邪薬とか、睡眠薬とか、いろいろあるの。本当はいろいろ、工夫したかったんだけどそこまで知識が無くて」

「いえ……この、粉が……」

この世界にも薬というのは存在する。けれど、これは、自分の知識とかけ離れたものだ。

「大丈夫、とってくったりはしないから。じゃあ、クリニック開業

に向けてがんばりましょ？あ、ジェイド！」

ジェイド様を見かけてかけていくミオを見て、僕は薬をミオの部屋に持っていった。

ミオが来てからの日々は、楽しいことばかりだ。

第1・5話 ミオの来てからの生活（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

……次から話がようやく進むのかも知れないです……お待たせしました。

第1話 はじまりの生活 8

うつつから離れて見たのは、昔の自分。

今思うと、いつ死んでも構わないような、そんな環境だった。

けれど、私にとってはそれが当然であり、何でもない風景だった。惨めでも可哀想でもなんでもない、普通だった。

折角拾い上げてくれた誰かを自分で疑い、救いの手は自分ではじき飛ばしていた。

心のどこかで、今思えば、パブロフの犬のようだと、思った。

パブロフの犬、というのは、古典的条件反射で有名だが、それを引き継いだ犬を使った実験が行われていた。

餌を与える人と、暴力を与える人がいる。

当然、犬は餌を与える人に甘え、暴力を与える人に怯えるのだが、それが長期化すると暴力を与える人に甘え、餌を与える人を怖がるという結果が得られたのだ。

それを使い、行われてたのは洗脳だ。

私は、あいつらに洗脳されていたのかも知れない。

それを解くために、今、ここにいて、あの人達に出会えたのだと思うと、少し心が軽くなった。

誰かの笑い声が聞こえた気がしたけれど、気にせず、私は意識を現に戻した。

**

とても心地のいい空色の中、私たちはクリニックを開業した。

さし当たって、一番に準備したのは薬だった。

点滴などの注射も、一部準備した。

pH調整なんかに手間取りはしたけれど、ケビン様のおかげでなんとか本当に極々一部のものは何とかなった。

ケビン様も、クリスと一緒に魔法使いではあったのだけれど、どちらかというと論理派の魔法使いで、物理と有機化学、無機化学を伝えたとそれらを用いて自分の好きなように化学反応させることができるとか、錬金術師のような感じのことができるようで。

それでお願いで、化学式を見せて、材料を渡して、合成して貰ったのだ。（見返りはもちろん、それらの学問の話だ）

慢性疾患の薬剤はとりあえず患者さんの様子を見て追加していくことにし、急性と思われるものなどを準備した。

抗菌薬をはじめとした、解熱剤、去痰薬、咳止めなどの風邪薬や、炭酸水素ナトリウムやH₂ブロッカーなどの胃薬、2刺激薬などの気管支拡張剤に、睡眠薬に、虫さされ用にステロイドなんかも一部用意した。あとは手荒れ用の保湿クリームなんかもジェイドとグレイスと一緒にねって作った。

消毒用エタノールは、グレイスにもつたいたいと言われながら酒を蒸留して、70%エタノールと高純度エタノールとを準備した。また、洗浄用に蒸留水も用意した。

診察室のようなものはジェイドに頼み込んで準備し、ベッドも2床、必要であれば往診する準備も。

患者は待つてはくれないだろうから、緊急を要するものは呼んで良いことにして、ジェイドやグレイスにもある程度基礎の知識をたた

き込んで今日に至る。

『ミオ、ミオ!』

私に話しかけるのは、FINEだ。私にグレイスから貰ったお菓子を
持ってきてくれた。

FINEは、あれから驚くほどの回復を見せて、数日で驚くほど元
気になったようで（断定出来ないのは私が眠りこけているときだっ
たから）、この屋敷に暇さえあれば入り浸っている。

家主も特に文句を言わないので、今では私と一緒にグレイスに読
書の弟子入りしている。

カルテを書く必要があるときに、みんなで共有出来た方がいいと思
ったからなのだけれども、思ったより難しく、習得ままならない
状態で開業してしまった。

でも、どうやら今日は平和で患者は一人も来なくて、暇だ。FINE
もグレイスが出したお菓子をつまんでいる。

FINEはあのケガの縁もあって、グレイスからは私の身の回りを頼
まれているだけなのかも知れないけれど、今まで誰もいなくても大
丈夫だったのだから、FINEの手伝いなどあってもなくても構わな
い……という、ひどく冷たく聞こえるけれど、そういう突き放し
た気持ちを露骨に出していったわけではなくて、ただの事実でしか
ない。

そもそも、ここに来るまで、誰も助けられない環境下にずっとあ
ったのだ。少し忘れかけていたけれども。

あの人は、敵だったのだから。

……眠っているときに、昔の夢を見てしまったからか、少し感情的
になっているようで、それもなんとなく、グレイスやFINE、ジエ
イドに気付かれて気を遣われているのを、私も分かっている。

だから、なんだというのだろう。

全てを話す必要性は感じないし、それならば、以前の自分を持つてくるべきでもない。

こう、昔を思い出して、一番イライラしてしまったのは、自分だ。新しいことをしていても、心のどこかで晴れなくて、イライラしている。そんな感情すら御せない、自分の子供っぽさに余計イライラする。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

あの頃のように、結局、誰にでも、謝っている。

『ミオ？』

ふと声をかけてきたのは、ジェイドだった。

イライラして、頭を抱えているときだったので、振り向いたときに思いっきり睨み付けてしまっていた。

『機嫌悪いのか？』

『ごめん、ジェイド。みんなのことは、関係ないのに……昔のこと、思い出しちゃって』

『あの、寝てたときに？』

『そうそう……、ここにるのが幸せだったから、折角忘れられてたのに』

私のゴミ屑のような過去話など、聞かせても胸くそ悪くなるだけだから話さない。

私がジェイド達から欲しいのは、同情じゃないし、哀れみでも、なんでもないから。

『言いにくかったら言わなくて良い。……でも、それは背中傷とか火傷とかと関係ある？』

私は驚いた。あれを見られていたなんて。

『最初、君が来たときに、首にも手形で大きな痣があった。……それと、関係も?』

『関係なく、はないけど、話せない』

『なら、話さなくていいよ。別に聞いたかったわけでもない。ただ、原因が分からなくてフィネが異様に怖がってたからな』

思い返せば、少し戸惑った感じがしていた気がした。謝っておこう。

『ありがとう。なんか、心が軽くなった』

何かが変わったわけではないけれど、こう過ごしていれば10年後とかに話してもいいのかも知れないと思った。

開業初日は、名誉なのか不名誉なのか、患者数0という残念な結果で締めくくられた。

第1話 はじまりの生活 8（後書き）

訂正しました。ご指摘ありがとうございます！

前回で終わっても良かったかなあと思っただけ、

第2話をジェイド視点にして、ジェイドのヒーローポジション確立に向けて努力した方がいいと思ってここまでを1話にしました（汗）。ずっと、美緒視点にしようかなあと思ってたのですが、力不足です。もうちょっとジェイドのキャラが（私の中でも）たたないと、フラグどころではないですから…（笑）一応、設定だけは凝ってるはずなので。

パブロフ云々は、教養の授業でとった看護学部の心理学の先生が、言っていたはずなので間違いではないはずですが…（間違っていたら私の記憶違いです……）。

ちなみに、洗脳と、マインドコントロールの違いは説明しなくて、本文で使い分けても……大丈夫、ですよ……？

第2話 手から零れるもの 1（前書き）

ジエイド視点です。

第2話 手から零れるもの 1

どこへ、行つたのか。

掴んだはずが、遠ざかる。

戸惑ってしまった一瞬が、自分の不勉強が、刹那の油断が、拭えぬ後悔を山ほど生んだ。

もう、死んでしまった。戻ることは、ない。
多くの者が手をすり抜けて遠くへ行く。

そして、実感する。

俺には何も救えやしないのだと。

『山また山をなして、

彼らは死んでいく。

二度と立ち上がることがない。

ない、

そして、

ない。』

ポエム（一部抜粋）ノゼルマ・メーアバウム『アイジンガー』（秋山
宏訳）

「……ジエイド…、ジエイド？」

肩を叩かれて俺は目が覚めた。椅子でうたた寝をしてしまったみたいだ。

嫌な過去を見た。おかげで変な汗をかいている。

ミオは心配そうに俺の顔をのぞいてきた。

「大丈夫？ 魔されていたからつい起こしちゃったけど…」

「いや、助かった。あんま見てて気持ちいいもんでもなかったから」「それなら良かった。御飯用意出来たから、食べましょう？」

彼女は無邪気な笑顔で話しかけてくる。

言葉が通じるようになって、彼女の言っていることが分かるようになった、医学のこと、化学のこと、物理学のこと、様々なことを教えてもらった。こちらからは、日常の常識や作法、様々なことを教えた。

けれど、俺は自分のことを、…過去を話す気にはなれなかった。必要性も感じなかった。

同様に彼女も自分のことは話さない。体に刻まれた無数の火傷や切り傷や痣のことも。

傷を隠し合うことも、けして悪くない。

知ってしまえば、きっと俺にこんなに優しく手を差し伸べることなどないと分かっているから。

こんな女々しくなっている自分の思考に、少しがっかりした。夢のせいだ。

「あ、グレイス！ ジエイド連れてきたよ」

「じゃあ、食事にしましょう。ジエイド様、今日の料理はミオに聞いて作っただですよ、デザートもあります」

食卓を見ると見たことのない料理がチラホラ。

…… まるい塊が茶色のソースの中に沈んでいる。
それに、なんだ、これ。

「ハンバーグっていうの。私の故郷での、大人気メニューなんだから」

「何の塊だ？」

「本当は、牛肉と豚肉の合い挽き肉で作るんだけど、グレイスと相談してアリフの肉を使ったの」

「アリフの肉なのか？ 一体」

アリフは、一般的に食用として用いられない。何故ならアリフは神聖な動物であり、神使とも言われているからで、また農耕の際に使われる動物ある。

アリフを食すときは、何かの儀式に限って、アリフを神使とする神の神殿でアリフのスープが振る舞われる時か、アリフが怪我をした時程度で、普通に売られているものではない。

「ベルダさんがね、飼っていたアリフが転んで怪我してしまったから、良ければどうぞって、フィネが持ってきてくれたの」

「フィネが？」

「フィネ、ちよくちよく、ベルダさんの様子を見に行ってるみたい。今日の御飯も、ベルダさんの所で頂くそうなの。私も後で様子を見に行ってくるわ」

ベルガというのは、この街の外れで農場を開いてる、老年の女性だ。フィネの前の前の雇い主だったそうだが（今はあの事故が縁で俺の所で雇っている）、最近は寝込むことも多くなったため、心配してよく様子を見に行っている。ミオも、往診に行っているようだ。

ミオが言うには腎臓が悪く、それが原因で骨折しやすくなったり（寝たきりなのもよるけて手をつき、腕を骨折し、気分が沈んでしまったためだ）、貧血になりやすくなっている。まだ薬で打つ手がある程度だとはいつてはいたが、薬が効かなくなったら打つ手がないのだと、ミオが哀しそうに言っていた（ミオの世界では、血を綺麗にするための治療器具があったりするそうだが、ミオの知識ではとてもじゃないが作れそうにないらしい）。

ミオにとって、この世界で初めての患者だ。気になるのは仕方ないだろう。

俺はとりあえず、ハンバーグなるものを口に運んだ。

「…おいしい」

「ほんと？美味しいならまた作るね」

「ああ、また、作ってくれ」

- - - - -

食事が終わって、ミオは診療所の方に往診の道具と幾つかの薬を取りに行った。

ミオが開いた診療所は、常に閑古鳥が鳴いている状態だ。それは仕方がないことだと思っている。

この国の医療とは宗教の一環であり、神の加護…メディ神の加護がない治療法は邪道でしかない。つまり、医療行為は神官のお家芸であり、医師というのはメディ神に加護を得たレシピを用いて患者を医療することしかできないし、それが医療行為だと考えられている。それ以外を行って、何かあった際は、縄にくくられることとなる（ミオがそうならないように、手は打つつもりだが）。

メディ神の神殿が幾つかあるため、レシピは幾つか存在するが、神

官の中でも一部の選ばれた者しかそれらを学ぶことはできない。

……俺は諸事情で全てのレシピを知っているが、ミオの行為はそれに当てはまるものはない。

普通の町民は、神の加護のない治療法などには目も向けないのは仕方がない……神子であることを公表すれば良いのだろうが、そうすると神官が黙っていないだろう。神殿の派閥間でミオの争奪戦になる……それは避けなければならない。

ミオの気持ちも考えるとどうすればいいのか分からないのが正直な感想だ。

…頭が痛いと思いながら、一人で町はずれまで移動させ、何かあるのも大変だと思い、今日は俺が彼女についていくことにした。

第2話 手から零れるもの 1（後書き）

論文を大量に読まなければいけなかったりでなんだかんだで間がかなりあいてしまいました。（でも、今日の発表の準備も終わってないのですが）

…ジェイドのキャラが固まらなくて、設定を煮詰めていました。。。最初は男らしい人を目指していたんですが、いつの間にかこんなキアラに。ジェイドのせいで難産でした。。。。

病気に関する豆知識を入れたいのですが、あんまり不自然な、偉そうな説明にならないように取り入れること、また人を不快にさせない表現の難しさを感じています…。

偉そうだったり、不自然だったりしたら表現を改めますので一報下さい。

冒頭の詩を書いているゼルマは私が好きな詩人の一人です。

中学生の時、ネットで知り合った方に詩集を頂いて、読んだ際に衝撃を受けました。ポエムはとも長い詩ですが良い詩なので、興味を持って頂ければ手に取って頂ければ幸いです。

第2話 手から零れるもの 2

「ベルガさん！今日の体調はいかがですか？」

ミオは優しく声をかけ、手を差し出す。ベルガは優しく微笑みながら、ミオと握手した。

「フィネから聞いたんですけれど、今日は全部御飯を食べられたそうですね。聞いたときに嬉しくなっちゃいました」

「フィネさんが作ってくれたミオさんの里の料理がおいしくて」

「じゃあ、またフィネに別の料理、教えておきます…というより、私が御飯を作りに来ますよ」

最初の挨拶が終わった頃だろうか。

ベルガが後ろにいる自分の方に興味に向いた。

「ミオさん、後ろの御方は…」

「私がお世話になっている、ジェイドです」

「あらあら……ジェイドさん、ベルガと申します。ミオさんにはとてもお世話になっています。宜しく願います」

「先日はアリフをありがとうございました。」

ベッドの上から優しく微笑まれ、俺は挨拶を返した。

ミオは、フィネが台所にいるからフィネの様子を見に来るように頼んだ。

台所に行くと、フィネがせわしく料理を作り置きしていた。

「フィネ」

「ジェイド様！」

フィネは俺の姿を見ると、膝をつけ、手を合わせ、最上級の挨拶をする。

「本来ならば、ジェイド様やミオ様の世話をしなければならないこと、分かっているのですが…」

「よい。ミオがここに来るようになってから活き活きとしているし、もとより私の世話はグレイスだけで足りている」

「ですが」

「構わない。お前は、ミオの喜ぶようにしてやればよい。あと、このような態度で接されると、ミオも何か感づくからやめろ」

ミオは唯一、何も知らず、俺の手を取ってくれる人間だ。それを壊したくはない。

「分かりました。……ジェイド様は、なぜ、ここへいらつしたのですか？」

「ミオの付き添い。まだ昼だから良いが、あいつを一人で歩かせるにはまだ不安だからな」

「ありがとうございます…私が付き添うべきなのですが」

「ベルガには、返しても返しきれない恩があるのだろう？ならば、返せるときに存分に返せばいい」

フィネは以前、ベルガに雇われ、此処で働いていた過去がある。

その際に、フィネはベルガに大変目をかけられ、可愛がられていたそうだ。

それに腹が立ったベルガの息子や孫に追われ、屋敷を追い出されるまでは。

「ベルガの血縁のものは、ベルガの世話には来ないのか？」

「なんでも、遺産の相続の話で忙しいんだそうですよ」

「なんということか」

ベルガには息子が3人、孫が8人ほどいる。

本来ならば、動けない彼女を世話するのは、ミオでもフィネでもなく、そいつらのはずだ。

「私が通い始めてから、ベルガさん、以前のようにだいぶ笑うようになられて…嬉しいんです。ミオ様にも診ていただけて、本当に…」
「いや、礼ならちゃんとミオに言え。俺は何もしていないし、俺はミオに逆に色々教えて貰っているしな」

そう、今日ついていくなら、実践でいろいろ教えてくれる、とミオは張り切っていた。

最初に握手したのも、あれは手に触れることで様々なコトが分かるのだという。

例えば、手の温度。ベルガは腎臓が悪く、貧血気味だ。貧血だと末端の血流が悪くなり、手が冷たくなることが多いのだという。

また手の感覚。腎臓が悪くなる原因の持病があるそうでそれで、感覚が無くなることもあるのだそうでそれも確認出来る。

あとは、手のむくみ。腎臓が悪くなると、水の排泄がままならず体がむくむのだという。他にも握力や爪の様子なども分かるといっていた。

部屋を追い出された後は、骨折した足の確認と、足先の感覚や浮腫などの確認をした後に、マッサージや爪切りをするのだそうだ。

さすがに女性だから見せられないとはいっていたが、屋敷でグレイスを相手に（グレイスは面白いようにひやあなど声を上げていてうるさかったが）マッサージのポイントなどを実地で教えて貰った。だからどの位時間がかかるのか、予想はついているのでその時間を潰すだけだ。

「FINE、今日はベルガと一緒に食事した後に、屋敷に来い。ベルガについて聞きたいことがある」

「はい、分かりました。伺います」

俺はしばらくした後、ミオと一緒にベルガの屋敷を去った。

第2話 手から零れるもの 2（後書き）

後から見直すと、会話しかなくて申し訳ないです……。

でもやっぱり、偉そうな蘊蓄になってしまった……

…手をみる、結構簡単なことなので、自分のおじいちゃんおばあちゃんに対してやってみてください。

高齢の方だと、腎臓が悪いことも多いのですが、逆に結構水を飲まなくて大変になることも多いです（エコノミー症候群の原因に）。浮腫がない場合は水を適切に飲んでいるか（唇の乾燥など）、頻尿の気がないか確認することも。。。（特に、男の方だと、頻尿が酷いから水をコップ一杯も飲まないって方もいます）

いつも健康でいて欲しいからこそ、大切な人の手、握ってみて確認してみてくださいね！爪の切り方なんかも載せたかったんですが長くなるのでカット……。。

そういえば、アリフ＝牛、です。。。

気付かれた方もいるかもしれませんが、名前e t c＝ドイツ・ギリシャ風、思想など（特に医学に関して）＝古代エジプトを参考にしています。

（去年のトリノ・エジプト展で興奮したので……）
言葉なんかはどちらからも適当に検索してなんとなくでつけてます。

ミオの知識は、こないだの自分の実務実習（半年）で得た知識だったり、研究（臨床系）で得た知識を使っています。

第2話 手から零れるもの 3

「ごめんなさい……ごめん、なさい。つらかったですよね、ごめんなさい」

ミオは、白いベルガの手をつかんで泣きながら謝り続けた。

食事をしているときのことだった。フィネが食事をしようとし、ベルガが「骨折は直ったから久しぶりにテーブルで食べたい」と補助の杖をつきながら歩き出したら、急に胸を押さえて苦しみだしたのだと急いで帰ってきたのだ。

ミオは思い当たる何かがあったのか、道具を持って走ってベルガの屋敷に向かった。けれど、もう、ベルガの手は冷たく、事切れていた。ミオは急いで心肺蘇生を図ったが、だめだった。

「ベルガはどうして急に？…腎臓が原因なのか？」

俺は、酷かもしれないが原因を追究した。下手をしたら、面倒なことになるかもしれないから、他の人には話せないかもしれないが、本当のことを知っておきたかった。

「いいえ。解剖する術も何もないから確定できないけど、フィネから聞いた症状と状況から考えて、腎臓とは直接は関係はない」

「じゃあ、なんだ？」

「……ベルガさん、マッサージはしていたんだけど、本格的に足を動かしたのは久しぶりだった……そのせいよ。気にかはけていたんだけど、もっと注意していればよかった。私がいたら、間に合ったかもしれないのに」

「よくわからないんだが」

ミオはベルガのカルテを広げて、空きスペースに線を何本か描き、説明を始めた。

「これが、足の静脈ね。寝たままだと、圧迫されて血液が鬱滞することによつて、血栓ができるの。動いたショックでそれがとれれば……どこに行く？」

「心臓か？」

「そう。それで、心臓が最初に血液を送る場所はどこ？」

「肺……だから、呼吸困難を起こしたのか？」

「私たちがもし、血栓ができたとしたんだったら、胸が少し痛くなるぐらいですむの。でも、ベルガさんは高齢で心臓もあまりよくなかったし、血管ももろくなっていたし、腎が悪くて水をとるのも控え気味だった。私が来るときはできるだけ動かすように心がけてはいたけれど……もっと注意すべきだったのよ」

彼女は涙をこぼして、俺に懺悔をした。

俺も、似たような経験は山ほどある。少しの油断で、少しのおごりで、人は死んでいく。

人を救うということは、並大抵なものではない。それは、驚くほど難しい。

神の祝福を得ていたころの俺はそれをひどく痛感していた。

……神子であるミオですら、そうなのだな、と思った。俺と何も変わらない。

少し、意外というよりも、当たり前なのかと思える自分が、そこにいた。

「ミオ様！」

「フィネ……ごめんなさい……！」

フィネが現れると、ミオはフィネに向かって謝りはじめる。

「いいえ、ミオ様がいらっしやなければ、私もここに通うことはできませんでしたし、そうなっていましたら、ベルガ様は笑うこともなく余生を過ごされていたと思います。ベルガ様に笑顔が戻ったのは、ミオ様のおかげです」

「でも、…でも」

「ベルガ様にかわって御礼申し上げます。ありがとうございました」

ミオがFINEの手に縋るように泣くのをみていると、戸口がなにやら騒がしくなってきた。

誰かがきたのか？これは、面倒なことになりそうだ。

「申し訳ありません、ミオ様。少し、玄関を見てきます」

FINEが断って玄関へ足を向けると、この場に似合わないような罵倒があたり一面に響く。

その声に俺もミオも玄関の方へ向かうと、そこには……見たくない顔がいた。

第2話 手から零れるもの 3（後書き）

投稿の期間が長くなってしまいました。

反省してます……；次で手からこぼれるものは終わりになります。

で、一番最初の話の伏線を、そういうものでもないですが

もってきたい、このごろ。

11日の震災、私は妹と一緒に東京にりましたが、何もなく、普通の生活がおくれました。

東北大に通う、高校時代の同級生は、命からがら無事でした。茨城が実家の友達の家族も無事でした。

よかった……と思うもつかの間、津波の映像を見て、心がつぶれそうでした。

今はヘルツが違ふところにいますので、節電しても、東北や関東の方のためにならないのですが、東京にいる妹にはできる範囲でいいから節電して欲しいと頼みました。

病院などがとても心配です。

私が体験したところの話では、東京の大部分は物資の面で被災したという（電気の間では苦労していますが）ところは少ないと思います。

必要以上の物資の買占めなどは控えていただければ、と思います。

第2話 手から零れるもの 4（前書き）

誰が待ってるのかわからないのですが、お待たせしました……

間が空いたため、文章の書き方を忘れました……すみません……
ごめんなさい！

第2話 手から零れるもの 4

ベルガの親族がタイミングよく来た後のことは、正直よく覚えていない。

不本意な罵詈雑言を浴びせられ、心を閉ざしかけたミオの耳をふさぎながら、フィネと一緒に屋敷に戻った。

わめいてきたベルガの遺族を半ば脅すようになだめたあとは、ずっと屋敷にいた。

ミオは泣き続けた後、魂が抜けたように呆けてしまった。

まるで過去の自分を見ているようで、何を言っても俺のそばを離れなかったクリスの心境が少しわかる。

「ミオ、さすがに3日目だ。ものを食べる」

「いら、ない」

「せめて、水を……」

「いらない」

数日前に貧血で倒れ、ベッドの上に移動してから彼女は目が覚めても何も食わず、何も飲まない。

シヨックなのはわかるが、これでは死に急ぐようなものだ。

昔の俺を、そして今の俺を見ているようで、

「私、ベルガさんを救えなかった」

「……そうか？」

「だって…だって…！」

「ベルガは笑っていたぞ」

「え？」

「最後は、肺塞栓で苦しんだかもしれない。だからなんだ？お前の

行為はすべて否定されるのか？」

「……それは」

「なあ……昔話をしようか」

こいつになら、少し、俺の過去を話をしてもいいかもしれない。
傷を負った、こいつになら。

「俺は昔、軍に従事した医師だった」

「軍……」

「治しても治しても死にいくような馬鹿だらけだったよ……。
でも、俺はそこで多くの実践を積んだ。
そこで得た知識で、俺は天狗になっていた。なんでも治せるのだ
と。」

……でも、そんな俺は国に戻って数か月後、かけがえのない大切な人の命を、病で失った」

「やま、い？」

「そいつは笑っていた。全力を尽くしたがまったく手が及ばなかった俺にありがとうと繰り返した。」

その時、俺はなぜ礼を言われるのかもわからなかった」

今も、本当は礼を言われた理由はわからない。

俺は救えなかった。あの苦しみを和らげることなど、何一つできなかったのに。

「その人は俺に知ること、次に生かせといって、死んだ後、俺に

解剖するように、遺言を残して死んだ。

だから俺は、泣きながら、わめきながら、その人の四肢を観察するために切り刻んだ……

けれど、病のことは馬鹿な俺には分からなかった。だから俺はそれを知りたくて、今、勉強をしている。

…次に、同じ病になったものを、救えるように」

俺は、救えるのだろうか。

まだ救えない。でも、いつの日か。

まだ俺自身、吹っ切れていない、過去の思い。

俺の後ろにある、本物の山のようにできる死体の山。

俺は彼らの死を活かして前に進めているのか。

否、といわれても否定できないくらい成果しか出せていないのが現状なのもわかっていてる。

でも、俺にだから、言えることはある。悩んだ俺がかかっている信条が。

「ベルガのことを悔やむなら、お前の知識でより多くのものを生かせ。今回の経験も、ベルガの命の重さも、すべて。

それが医療を行うものの償い方だと、俺は考えている」

「償える…？」

「償えるさ、…ベルガもそれを望んでいる」

「ベルガさんも…？」

「お前は、遺言状のことは聞いたか？」

ミオは首を振る。知るわけがない。

こいつはずっと、ベルガが死んで3日も放心していたのだから。

「ベルガは手持ちの宝石の遺産の相続人にお前とフィネを指定した。

『医術をより発展させるよう』だと」

「……ベルガさん」

「ベルガはお前がこのまま飲まず食わずで死ぬことを望むと思うか？」

「……いいえ」

「だったら、食べる。元気になって、俺とクリスにまたいろいろ教えてくれ」

「うん……うん」

彼女は何かものが落ちたようなすっきりした顔つきで俺の方を見る。後ろに控えていたFINEに軽いものを作るように言うと、歓喜の声が屋敷に響いた。

第2話 手から零れるもの 4（後書き）

某K先生のきつとシリーズ手法を使っでしまいたくなるのを我慢して書こう書こうがんばっていたらこんな感じになってしまいました……

（書きたくないからと、一番嫌なところでいきなり話を終わらせ、

新章スタートという、プロなのかと叫んだ手法）

いったん書き終わったら、全部改稿したいです……

もうちょっときれいに書き上げてあげたい……。

（ってか、プロット作ってから書けばいいものを）

精神的に、今も結構ぼろぼろなんです、

書きたいシーンがこの話の中に、3つほどあるので頑張って書きたい。

その一つが、結構さらっと出した、ジェイドの過去のシーン。

あとのほうで番外編でまるまる1つ話使って書きたいんです。今書くと、つたない伏し線張りが台無しになる……ので……

次は、プロローグから登場していない、あの人が登場。

予定ではもっと遅い登場の予定が……

シーンを描きたくてしょうがないので、早く登場です。

第3話 もうひとりの神子 1

いつだって心の底から笑っていて欲しかったのに、
助けていのに、

俺はただ、無理して人形のように笑う彼女に胸を貸すしかできなかった。
った。

ベルガさんが亡くなって半月ほどの時間が過ぎた。

私はジェイドからこの世界の医術についていろいろなことを改めて聞いた。

神殿で行う治療のみが神の加護を得ることができ、今私が言うことは本来は見つかるかと流刑になったり最悪死罪にあたる可能性があること。

本当はベルガさんが亡くなった時点で私には何らかの処罰が下る可能性が大きかったこと。もし、ばれてしまったときには、メデイ神の神子であることを公言する必要があること。

神子であることを公言することのメリット、デメリットを事細かに教えてもらった。

公言してしまう最大のメリットは、私が行う医療行為が神の加護を受けているという認識になること。それによって、民も私の治療を積極的に受けてくれるようになるし、また神殿や国からの罰則もなくなる。

デメリットは最悪神殿か城の中に閉じ込められ、一生出られなくな

る可能性が高いこと。なんでも、代々の神子は神殿から出されることはないらしい。

また、神子を隠していたことでジェイドとグレイスが死罪になる可能性もあるらしい。

医療なんてしないで、こっそりしておくのが一番だとも思った。でも、私は医療をしたい。ジェイドたちも格段、反対はしなかった。

『ジェイド、できそうかなあ？』

『ケビンに頼んだが、なかなか難しそうだなあ……課題は進まず、つてとこだな』

私が作成を頼んだのは、レントゲンの機械。画像診断ができるように、と考えた結果だ。

できることなら、非破壊検査ができるものが手から出るほど欲しい。血液検査ももっと細やかに迅速に行えるようにしたいが、こちらの世界での公衆衛生状況を考えたときに、血液検査で管理が必要な疾患より、治療の難しい結核なども発見でき、外傷に対応もできるこちらが優先だと、私とジェイドは判断した。

X線の発生の機械と、フィルム。

フィルムの感光板に関しては比較的すぐに作れ、問題はなかった。問題というよりも重要なのはX線発生装置だ。

ターゲット金属の調達とフィラメントはジェイドとケビン様のコネでなんとか行えたが、この時代には電線もなければ発電所もなかった。発電機をケビン様お抱えの魔術を使える技術者と相談して1週間ほどで簡易的なもの作っただけなのだが、なかなか安定的に作る事が難しい。

また、X線を発生させるととても熱が出てきてしまったため、それを

冷却する必要もでてる。

そして、技術者や患者を不必要に被曝させないための防護服の作成も必要でどれもこれもあまり芳しい結果を得ることができていない。半月そこらで成果を出す、というのは難しいとはわかっていても、現代に行けば普通に医療現場に転がっているもの。それが使えないのはもどかしい。

『あーもう、挫けそう…』

『挫けるな、お前だけが頼りなんだ』

『そう、なんだけどねえ…』

『それにしても、このレントゲン、は、本当に体の中が見れるのだな。驚いた』

『モノクロだし、コツがいるけどね』

私とジェイドは試験的に一度、足と胸部のレントゲンをとった。

私の足のレントゲンは電力が安定していなかったためきれいに取れなかったが、ジェイドのは二つともきれいに撮れた。ジェイドははじめてみたレントゲン写真に驚きながらも感動していたのを覚えている。その後のX線発生管の熱を下げるのが非常に大変だったが、だから、今は電力の安定化とX線発生管の冷却が一番の課題だ。そのために、毎日のようにケビン様の屋敷に通っている。

『裕樹がいればなあ…』

ジェイドの屋敷についた後、私は小さな声で幼馴染の名前を呼ぶ。いつもいつも頼りにしていた、幼馴染。

裕樹は私より頭が良く、工学を専攻にしていた。

工学の中でも設計でもプログラミングでもなく、回路とかを作る方を学んでいたはずだ。医用工学の教科もとっていたといっていた記憶がある。卒業の単位には必要のないのに病態とか薬理とかの医療系

の講義もとっていたけれど。

こっちに飛ばされたときの本を見て勉強しただけの私なんかよりも
ずっとそっちの造詣は深い。

「裕樹：」

もう一度、声に出してつぶやいたら、余計に彼に会いたくなった。

第3話 もつひとりの神子 1（後書き）

前回の空きを考えたらありえないほど早いですね、えへへ；；

それにしても、出てこなかった、名前だけしか……。裕樹くん！次こそ、出たらいいなあ。

レントゲンについて、細かいところは目をつぶってください。あはは；

ちなみにX線に限らず、被曝の可能性がある治療や検査はいくつかあります。（PETとか）

放射線について少し話が出たので。

昨今、放射線に対して多くの誤解や誤解に至らないまでの誇大なメディアの放送、ネットの流言が多いですが、自分で考えて取捨選択してほしいと思っています。

ちなみに、私はあんまり心配してない派です：静岡なので距離があるっていうのもありますが、積極的に関東のお野菜も購入してますけど、放射線が怖くて海水浴にもいけないし、飛行機にもあんま乗りたくないあって考えるくらいにはおびえてはいます（笑）

とりあえず、メルトダウンした地域には数十年、数百年住めなくなる云々はあんま信じてません。チエルノブイリ周辺に住めないのは、あれ、コンクリートで固めただけでまだぜんぜん中で暴走してるんですもん（汗）しっかり反応をとめさえすればすめると思いますよ。今の体制だとそれに数十年かかるかもしれないですが（汗）。

すめないんだったら、広島と長崎にはまだ人が住めないor住めなかったという論理になる。。。原爆が落ちてるからこっちのほうに住めない期間は格別に長いはずなのに；

っていうかあとがき長くてすみません……………；

第3話 もうひとりの神子 2

裕樹。

フルネームは宮柱裕樹。

家が向かいで、幼稚園に入る前からずっと一緒に遊んでいた。

私が出た大学に通う時も、過保護なのか私の部屋からスーパの冷めない距離に部屋を借りて住んでいた。

過保護っぷりは、大学に入ってからできた親友の美香と裕樹が付き合ってから続いた。

裕樹は何でもできた。

勉強も私に教えてくれた。

部活での剣道もすごくて、高校のときは全国大会に出場していた。

大学から始めたサッカーでも花形だった。

友達づきあいもうまくていつも人の真ん中にいた。

仕事を探して困ってる時もバイト先も紹介してくれた。

なんにもなくて、勉強ばかりに逃げていた私とは正反対の幼馴染。背が高くて、かっこよくて、ウィットに富んでいる、自慢の幼馴染。

あの世界に未練があるとすれば、彼と親友の美香だけだ。

美香はあんなに追い詰められていたけれど、誤解は解けたんだろうか。そんなことばかり考える。

そんなことばかり考えてたせいか、その日、夜に見たのはあの世界の夢。

私がいって、親友の美香がいって、裕樹がいって。

三人でいつもみたいに遊んでいる、なんでもない幸せな日々。

今は、もう届かない、悲しい夢だった。

『ミオ様？ ミオ様、朝でございます』

気づけばFINEが私を起こしに来た。

鐘の音が響く。いつもはこの鐘の音は朝食を食べた後に聞いているのに、寝坊したみたいだった。

『ミオ様、つらい夢でも見られましたか？ 涙の跡が…』

言われてほほを触ると涙の筋が感じられた。だいぶ泣いていたようで少し皮膚がかぴかぴする。

『夢のことなんて覚えてないからわからないわ。FINE、ごめんね、朝ごはんの準備…』

『食事の準備は私とGREYS様の仕事だから心配しないでください。もう昼に近いので、スープだけにしましたが、召し上がってくださいね』

『今日も、ジェイドとケビン様の屋敷に詰めるから、昼ごはんはいらないわ。夕食だけ、お願い』

今日も課題は山積。

本当はこんな小娘ひとりじゃ、解決できない。偉人が積み重ねたうえで医療をしてきたことを実感する。

レントゲンができたら次はエックス線の見方を確認して、そして今は胸に直接耳をあてて聴いてる心音や肺の音を聴診器で聞けるよう

にしたい。

やりたいことは本当にいっぱい。だけど、それを実現するだけの技術は私にはなくて、人に頼らないといけない。

今の開発にかかるお金だつて、ジエイドとケビン様にすべて出してもらつてゐる状態だし、いつかは返さないといけないと思つてゐる。知らず知らずのうちにため息がこぼれる。

『裕樹がいればなあ…』

『ユウキ…？ミオ様のご友人ですか？』

『幼馴染。すぐく頭が良くて、何でも持つてて、優しい、自慢の幼馴染よ』

『ミオ様がおっしゃるなら、一度、お会いしてみたいです』

『惚れてはだめよ？私の親友の恋人なんだから』

『え、男の方なんですか？』

『うん、すぐくかつこいい…と思つてゐるわ』

FINEが聞いてくるからいろいろなことを話した。

高校の時の修学旅行のこと、中学のころの部活のこと、大学の生活のこと。

どのころを思い出しても、裕樹が出てくる。

それほどずっとそばにいたのに、ここに来てから数か月、今まで思ひ出さなかったなんて、なんて薄情ものなんだろう。

そう思つてへこみはじめると、買い物に行つていただろうグレイスが駆け込んできた。

『ミオ！教会の前で、喧嘩が起こつて怪我人が！』

『本当に？FINE、ごめんね、ちよつと行つてくる…！』

鞆を持つて、グレイスの後ろに従つて行く。

教会は医療の中心だが、基本的に信者や町の住民しかみない。

だから宗教などのわからない旅人などは喧嘩などに巻き込まれても基本的に放置されることが多い。

今回もその類だろうと思い、行き着いた先で心の底から驚いた。

「ゆう、き……？」

「…美緒？」

見間違っはしかなかった。

私の幼馴染だった。

第3話 もつひとりの神子 2（後書き）

わかりやすい展開で、すみませ…；

次はジェイドをいじめたいとおもってます（笑）

もう一つ話を書きたいなと思いながら、キャラ立ちとネタをもつと
詰めないとこの話の二の舞になると思うるので頑張ってます（笑）
と思ってます…；

第3話 もうひとりの神子 3

裕樹の怪我は出血の割には大したことはなく、止血さえしてしまえば終わりだった。

逆に私の取り乱しようの方が、グレイスに心配されていた。

ねえ裕樹。

なんでここにいるの。

どうして怪我なんてしたの。

美香はどうしたの。

聞きたいことはいっぱいあったんだけど、嗚咽の中で声になったのは、一つだけだった。

「裕樹、会いたかった…！」

グレイスがすごく困っている。

私が年甲斐もなくわんわん泣いて縋り付いている様子は非常に目立っていた。

はた目から見ると修羅場のように見えると思って、グレイスが屋敷まで誘導しようとしても私は泣きついて離れられなかったし。

そもそも私が子供みたいに正体をなくしてまでなくところを見たことなかったグレイスはそれだけで驚いて冷静に判断できなかったらしい。

とりあえず、私を引き離して、なだめて泣き止ませてから、裕樹に

話しかけると困ったことに、言葉が通じなかった。

私が胸にすがりついてる時には話せたのに、と思い、私と離れると裕樹は言葉を理解しないし、何を言っているのかわからなくなる…らしい。

推測なのは、私とは普通に会話できたから。

グレイスは、指輪の力が、裕樹と接触している間だけ、裕樹にも影響を及ぼしているという仮説を立てて、帰るときは私と裕樹は何年かぶりに手をつないでいた。

グレイスが困っているのは、別にこのことじゃない。

目の前の御仁の怒りだからだ。

なぜか、ジェイドが、かなり、怒っている。屋敷についたと同時にそれは目に入った。

……約束をすっぽかしたから？

でも、けが人や病人がいたら優先するっていう約束だし…

『その、男はだれだ？』

「美緒、この男は？」

私は、落ち着いてはいたけれど顔は真っ赤で目も腫れて泣いていたのは一目瞭然だし、ジェイドからしたら見知らぬ男と手をつないでいるし。

正直、再会の場面を見ていたグレイスにさえ、裕樹の正体は知らないだろうと思う。

そっう男の正体をいぶかしがるのは、家主として当然のことだろう。

一方、裕樹もジェイドのこと…紹介し忘れていたから、グレイスのことも知らない。

互いに自己紹介が必要だと踏んだ。

とりあえず、手をつないでいるのをあまり良しとしてなさそうだった。

たから、手は放した。

『ジエイド、グレイス。彼は私の幼馴染の、裕樹。けして怪しいものじゃないわ、私が保証する』

『幼馴染？この男が？』

「裕樹。今、私がお世話になってる、ジエイドと、グレイス」

「お世話について…男所帯の中にいるってお前！」

「今はちよつと席を外してるけど、フィネって女の子もいるから大丈夫」

「『 美緒 』」

ダブルサウンドってこういうことなの？

めんどくさー！

私は聖徳太子じゃないのよ！と叫びたくなった。

第3話 もうひとりの神子 3（後書き）

子供の男どもの和解は次に持越し…？

明日は鬼講師がいないので、病院（ノット病人バット研究？）で更新しようかなあ…と思ってるので第3話は6月中に終わりそうです。

第3話 もうひとりの神子 4

「ああ、それならこうすればいい」

険悪な空気に耐えきれなかった私がケビン様のところに裕樹も連れて行くと、裕樹はやすやすと私たちが詰まっていたところに改良を加えていく。

ケビン様が質問をするので解説をつけてくれはするのだけれど、いかんせん私と接触しないと言葉が通じない。

でも、接触をすると途端にジェイドの機嫌が悪くなる。

…どないせーつーねん。

ついつい関西弁になってしまいうくらい、困っていた。

裕樹があれもこれもとすいすい改良していくのを見て、思い出した。そーだ、こいつは歩く都市伝説とも言われた男だった。

教科書どころか書籍になっている事柄なら、一度読んだだけで理解し、諳んじることができる、天才ばかり集まるうちの大学の中でも別格だ。

ちなみに、卒業後に某海外大学に進学することも決まっているらしい。

らしい、っていうのは、直接聞いたわけじゃなくて、うわさで聞いただけだからだ。卒業後の進路なんてあんまり話さなかったし、恋人でもないのに将来を聞いても仕方がなかったっていうのもある。

とりあえず、目の前のことをどうにかしようとして、とりあえず、背中に手を置いてみた。絵柄的には面白いが、これが一番ジェイドの機嫌の悪さがマシな気がした。

「美緒、今日はこのくらいにしないか？ 俺、疲れたんだけど」

「そうね、お疲れ様。というか、怪我もしてるのに連れ出してごめん」

「そうだよ。俺、今日、刺されてたんだよ……いろいろあって忘れてたけど」

「いやいや、そこ、忘れちゃダメでしょ」

外を見ると日が暮れそうだ。

『ジェイド、今日はこのくらいにしたいみたいだけど、大丈夫？』

『構わない……が、その男は俺の屋敷に来るのか？』

『え、ダメなの？』

『ダメではないが……』

『寢床は診療所の一角でいいと思うし、ダメなら私の部屋を使ってもらって私が診療所の方で寝てもいいし』

『部屋はまだ余ってるからそういうことはしないでいい！』

『じゃあ、何が問題？』

『いや……とくに、ない』

歯切れの悪さが気にはなっただけれど格段問題はなさそうなので裕樹も連れて屋敷に戻る。

帰るとグレイスとフィネがちゃんと裕樹の分も食事を用意してくれていて、全員で食卓について夕食を食べた。

「裕樹、いくつか、聞きたいことがあるんだけど」

夜半過ぎ、未だ寝ようとしないうち裕樹を見つけた私は声をかける。

別にこの言語をジェイドたちが理解しないことをわかっているのだから別に他の人がいても問題はなかったのだけれど。

「いいよ、俺も聞きたいことがある」

「裕樹はどうしてこっちに？……それで裕樹がここにいるってことは、美香はどうしたの？」

「地震のあと、俺は気づいたらここにいた。ここにきて、まだ、日が4回ほど昇ったくらいか」

「……美香は？」

「美香とは、地震の前の日に別れたよ。ちゃんと別れたつもりだったけど、美香がお前に逆上するとは思わなかった」

美香と裕樹は私の中で理想のカップルだった。別れたなんて、思いもつかなかった。

「……なんで、別れたのか、きいても、いい？」

「俺が美香をちゃんと好きになれなかったから。それでもいいって言っていた美香がそれ以上を求めてきた時点でもう先が見えた」

「でも……！」

「俺はお前が美香と付き合いってほしって言ったから付き合いってたけど、別に美香のこと、恋愛対象として好きじゃなかったんだよ。友達としては好きだったけどね」

そんな……。

裕樹は確かに昔から私のお願いは何でも聞いてくれた。

まさか、美香との付き合いまでそれだったなんて。

「……なあ、俺も聞きたいことがあるんだけど」

「……いいよ」

裕樹に聞いたことを考えてたらショックで頭が立ちいかないから。

「お前はこっちにきてどれくらいたつ？それで、お前だけ言葉が通じるのは？」

「私は、8か月くらい…言葉は、くそ生意気な魔法使いに魔法をかけてもらったから」

「……魔法とかそんなあるんだ……、どという仕組みなんだろうな」

「そーいうとこ、興味持つのが裕樹らしいよね。裕樹にふれたときには言葉が通じるのはなんでかわかんないけど」

「まあ、いつそのこと、言葉ならってもいいけどな。長丁場になりそうなら」

「裕樹なら、すぐだよ」

裕樹の語学力は馬鹿にしてはいけない。英語はもちろんのこと、フランス語、スペイン語、ドイツ語も理解でき、その上ポルトガル語、ロシア語まで日常会話レベルなら使える。

すべて、遊びと称した勉強のたまものだが。

「それはそんなにいいんだけど、一番聞きたいこと、聞いてもいい？」

「いいよ」

「お前はここで何をしてる？……それで、ジェイドたちは何者なわけ？」

第3話 もうひとりの神子 4（後書き）

「歩く都市伝説」は某大でまことしやかに伝えられる妹の彼氏のあだ名です。

会ったことないけど、歩く都市伝説、いつか会ってみたいわあ。

一部ノンフィクションですが、大半フィクションですのでうのみにしないで。

ちなみに、最低点が片手酒飲みながら書いたレポートの85点とか冗談じゃねえと叫びたくなるうわさしか聞かないんです、歩く都市伝説（笑）妹に聞いたら事実だったし。

そういうイメージ「裕樹」です。

某大には姉も妹も妹も通ってるんですが、まあ、変態と天才の紙一重な感じは彼女らの知人を垣間見ただけで伝わってくるんですが、歩く都市伝説はその中でも格別な気がします…。

秀才と天才の違いを見せつけられる気がする…。。。

裕樹の役割というか、話の立ち位置を迷ってます。

どうしよう…まだ、ここらへんでは関係しない、後の方の話なんですけど。

最後に、どないせいつつーねんをどーせいつつーねんと最後まで迷った…（笑）

意味はどうすればいいの？を自虐的に突っ込んでる感じのニュアンスでとっていただければと思います！

（三重出身なのであんまきれいじゃないですけど、関西弁混ざるん

です；)

お知らせ（前書き）

すみません、話の更新じゃないです。

お知らせ

申し訳ありません。

私、うつになりました。

発症しかけたのは、たぶんこの子たちの設定を考えていたところで、診断されたのは、この最新を更新した1週間後です。

私の大学は今、セクハラで今、処分が食らった教授がいるので、

私の状況を（うつになった経緯）しられると、

まあ、3人ほどは処分が免れない先生方と

数名の同級生がいます。

何が言いたいかというと、この話、うつになった時に書いたので、

詳細は伏せますが、

『安らかな死〓幸せ』（マッチ売りの少女や人魚姫etc）という

結論を信じて、

それにむかい、書いていたものだったんです。

けれど、治療をはじめ、効果が出てきた今、

それは違うのではないか、という結論になり、

それもそれで「死〓幸せ」に関するエピソードも使ってみたとは思っているのですが、

美緒やジェイドたちの話でそれを使うのは違うのではないか、と思
い、

申し訳ないのですが、設定などを1から見直して、

私の「医療感」を全面的に押し出した、異世界ファンタジーに書き直したいと思っています。

多くの人に見てもらい、評価をいただいていたので、ここから修正できないか、考えたのですが、どうしても、難しいこと、

私の進路が調剤薬局に決まり、もっと身近に医療を行い、感じる環境が整うことなどを考え、

全面的に改定させていただきたいと思い、このたび、筆を執りました。

もっともつと深くプロットをしつかり立てて、彼女たちから、医療が今、どのように進化し、私たちがどのようにその恩恵を受けているのか、

また私たちが恩恵を当たり前だと思っている理不尽さや、医療とはなんなのか、命を救うとはなんなのか、病気とはなんなのか、生きるってなんなのか、

真剣に向き合って、読んでいる人に何かをつたえられるような話を、彼女たちのために話を作ってあげたいと思っています。

ブックマーク等、すべて外していただいて構いません。

書き直しをする際には、違うI D e t cで書き始めと思いますが、（転居により、契約などからメアドe t c変わるため、たぶん登録しなおしになるので）

ただ、ハンドルネーム（有終文）や月の王国、というタイトルは変わらないと思うので、

もしよろしければその際に再読していただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8741o/>

月の王国

2011年9月19日21時50分発行